

日本を英語で発信できる学生の育成
—Critical Thinkers are the Winners.—
Teaching English as a Launcher of Japan
—Critical Thinkers are the Winners.—

加藤 知子
Tomoko KATO

I. はじめに

本研究ノートは、2019年6月19日星城大学東海キャンパス1201教室で行われた平成30年度経営学部研究費助成研究報告会「日本を英語で発信できる学生の育成—Critical Thinkers are the Winners.—」発表資料を発展させて執筆したものである¹⁾。

本稿筆者は「平成30年度経営学部研究費」を使用して、星城大学経営学部一年生必修科目「英語Ⅳ」教材、*Critical Thinkers are the Winners.*（英語力基礎クラス用、学内限りで使用）を作成した。本研究ノートでは、教材開発の背景、「英語Ⅳ」受講生に適していると思われる英語素材（語彙・文法・内容）と、教材の構成についてまとめ、最後に、今後の課題を述べて結論としたい。なお本稿では、文末脚注にて引用箇所の参考文献を（片括弧付番号）、各ページの脚注にてコメントなど（括弧なし番号）を記した。

II. 教材開発に至るまでと作成英語教材の背景

星城大学経営学部開講の「英語Ⅳ」は一年生後期必修科目であり、学生は入学時 General Tests of English Language Proficiency（以下 G-TELP™）レベル5の結果でクラス分けされている^{1,2)}。本稿筆者の担当は、同テスト得点下位クラスである。学生の多くは英語には苦手意識を持ち、語彙・文法共に初級レベルである。一週間に一コマの「英語Ⅳ」では、彼らの動機や英語力を引き上げることは容易ではない。しかしながら、内容的には大学生のレベルを保ちつつ、英語の初歩を復習し英語嫌いを払拭する手掛かりとなる教材作成は可能ではないか。そうすれば将来、教室を離れても、英語学習を継続しようという気持ちが彼らの中に生れてくるかもしれない。

本研究による教材はタイトルを *Critical Thinkers are the Winners.*（以下 *Critical Thinkers*）とし、英語素材にクリティカルシンキングを反映させて執筆した。ゼックミスタとジョンソン（1996）によれば、クリティカルな思考とは一種の技術であり、「効率的なコツと訓練によって、誰でもある程度の水準まで伸ばすことが可能」であるという²⁾。クリティカルシンキングは大学生には誰にでも求められるものであり、しかも、入学時の英語

¹ G-TELP™の公式サイト URL は <https://g-telp.jp/> である。テスト開発・作製は米国カリフォルニア州の ITSC（International Testing Service Center）、日本での実施・運営は株式会社グローバルキャストが行っている。サイトには試験のレベルは四通りしか示されていないが、レベル4では受験者の差異が明確に出ない場合に提供されるレベル5を星城大学では利用している。ただし、新型コロナウイルス感染症拡大のため、2020年は例年と異なり、学年当初の G-TELP™ テスト実施（対面）が叶わなかった。

² 星城大学経営学部一年生の必須英語科目は「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」であり、前者二科目は英語会話などの活動を行う。後者二科目は英文の聴き取りや読解、文法学習などを行う。「英語Ⅰ」「英語Ⅲ」は一年生前期、「英語Ⅱ」「英語Ⅳ」は一年生後期に開講されている。

力その他の学力の高低にかかわらず、誰でもある程度身につけることが可能であるならば、それを反映させたコンテンツを英語教材の素材として使用することは意義があると言えよう。

クリティカルな思考の定義とは、「適切な規準や根拠に基づく、論理的で、偏りのない思考」であり³⁾、クリティカルな思考に含まれていると言われている三つの要素とは、「①問題に対して注意深く観察し、じっくり考えようとする**態度**②論理的な探求法や推論の方法に関する**知識**③それらの方法を適用する**技術**」であるという（強調はゼックミスタとジョンソン（前掲書））⁴⁾。本研究で作成した教材は、これらについての入門的素材ともなるよう工夫されている。教材の各ユニットは（表1）のとおりである。

表1 *Critical Thinkers* のユニット・タイトル・内容

ユニット・タイトル	内容
事前情報	Introduction から Unit 08 までの概要
Introduction	クリティカルシンキングの説明
Unit 01 Germany is a strong nation.	ドイツとフランスの比較
Unit 02 Wars between Germany and France	ドイツとフランスの歴史
Unit 03 Belgian children lost their hands, they say.	ドイツに関するプロパガンダ
Unit 04 They were unable to help the children with lost hands.	ドイツに関するプロパガンダの真相
Unit 05 How easily people believe the lie!	イラクに関するプロパガンダとその真相
Unit 06 Personal descriptions	身近な例
Unit 07 One person has good points and bad points.	身近な例の真相
Unit 08 Another basic example of propaganda	プロパガンダや身近な例から学ぶ教訓
応用問題	各ユニット応用問題のまとめ

出所：筆者作成

プロパガンダを取り上げたのは、いかにも本当らしい噂が流れ、注意深く観察しなければ真偽を見破ることは容易ではないこと、しかしながらパターンがあるので、それを見抜くことができれば、類似の事態が起こっても推論を働かせて真偽を判断できるはずであること、などが理由である。収録エピソードはモレリ（2002）を参考にした⁵⁾。また、応用として身近な例（筆者創作）を後半に挙げている。

語彙はなるべく平易に、しかしながら文法は、後期開講科目であることに鑑み、初級から中級に向けて進めるよう配慮した。詳細は本稿第Ⅲ章で記す。英語素材の提示の仕方（学習の進め方）は、竹蓋（1997）に示された分散学習の手法の一種 3 ラウンド・システムを参考に星城大学の実情に合わせてアレンジした⁶⁾。分散学習を採用すれば、学習者は、いくつかの異なるアクティビティにある一定の時間ごとに取り組むことになるので、単調さを回避できるという利点もある。詳しくは本稿第Ⅳ章で記す。

Ⅲ. 語彙と文法

(1) *Critical Thinkers* の語彙

相澤ら (2005) 『JACET8000 英単語 「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく』(以下『JACET8000』) は、日本人に必要な英単語 8,000 を 8 レベルに分けて収録している。すなわち、①Level 1 中学校の基本、②Level 2 高校の初級、③Level 3 高校の教科書・センター試験・一般社会人の教養、④Level 4 大学受験・大学一般教養初級、⑤Level 5 難関大学受験・大学一般教養、⑥Level 6 英語専門以外の大学生・ビジネスマン、⑦Level 7 英語専攻の大学生や英語を仕事で使うビジネスマン、⑧Level 8 日本人英語学習の最終目標、である⁷⁾。本研究での開発教材の対象は G-TELP™ レベル 5 下位得点者であることから、使用語彙は Level 1 の語彙を中心に収録するのが望ましいと判断した。

Critical Thinkers 執筆後、Someya (2009) に示された WORD LEVEL CHECKER を用いて、同教材の語彙(指示や説明書き中の語彙以外)が『JACET8000』のどのレベルのものかを確認した⁸⁾。結果は(表2)(本文のみ)と(表3)(本文と練習問題)のとおりである。教材全体の語彙の約 80%が『JACET8000』の Level 1 であることが確認できた³⁾。数は少ないが教材全体では他 Level の語彙も使用されている。Level 8 の語彙も若干ある(adversary、wrinkle など)。固有名詞は Unknown としてカウントされている。

表2 *Critical Thinkers* 本文語彙レベル

WL Tag	Word Level	Freq.	%
?	Unknown	86	9.73
01	1,000	698	78.96
02	2,000	53	6.00
03	3,000	20	2.26
04	4,000	7	0.79
05	5,000	14	1.58
06	6,000	2	0.23
08	8,000	4	0.45
-	TOTAL	884	100.00

出所：Someya (2009) からの出力

表3 *Critical Thinkers* 全体の語彙レベル

WL Tag	Word Level	Freq.	%
?	Unknown	504	9.89
01	1,000	3977	78.01
02	2,000	330	6.47
03	3,000	124	2.43
04	4,000	51	1.00
05	5,000	70	1.37
06	6,000	14	0.27
07	7,000	6	0.12
08	8,000	22	0.43
-	TOTAL	5098	100.00

出所：Someya (2009) からの出力

(2) *Critical Thinkers* の文法

教材で扱う文法事項は、竹蓋 (1997, p.282) の表 16-4 に示された項目(「文法力診断システムで評価可能な 96 項目」、以下「96 項目」)を参考にした⁹⁾。*Critical Thinkers* は後期開講「英語Ⅳ」用のものであり、前期には既に「英語Ⅲ」が開講されている。そこで、「英語Ⅲ」用に既に開発していた教材(これも学内限りの使用)と、*Critical Thinkers* が

³⁾ 『JACET8000』の Level 1 の 80%をカバーしているのではなく、教材で用いられている語彙の 80%が『JACET8000』の Level 1 であるという意味である。

扱う文法事項とを併せて、なるべく「96項目」の中の、初級・中級だと判断される項目を網羅するよう試みた。これらの一つずつを各ユニットで復習できれば理想かもしれないが、英語専攻ではない経営学部では開講される英語のコマ数は限られている。更に、これらの既習項目を単に初級から積み上げするだけの復習では中学校・高等学校の繰り返し感が前面に出て、かえって学習者の興味を損なう可能性もある。

そこで、初・中級の文法のうち、いくつかの項目を同時に扱い、効率よく文法事項をカバーするよう工夫した。例えば、否定表現を扱う時には複数種を一度に復習する。その中には **They were unable to help those children.** という文などにも学習者が遭遇するようにする。その際、**unable** の **un-** は否定を表す接頭辞だ、などと説明する。すると「96項目」のうち、否定文 (No. 36)⁴ に加え、接頭辞 (No.79) にも言及することができる。また、名詞の修飾を扱う時には、形容詞 (No.57)、名詞句 (No.7)、関係代名詞 (No.68) などに触れる。関連する複数の事項に言及することで、なるべく多くの項目をカバーするのである。各ユニット末にある応用問題 (和文英訳) では、英語の基本的語順 (主語+動詞+目的語、主語+動詞+補語) を土台として解説するので、「96項目」の No.10 (主語)、No.11 (述語動詞)、No.13 (直接目的語)、No.14 (補語) に繰り返し言及することができる。

IV. 分散学習と教科書の構成

Critical Thinkers は、第Ⅱ章で触れたように分散学習の一形態、3ラウンド・システムを応用して構成した。分散学習を採用すると、「ある程度のレベルまで学習したら学習を一時中断して休憩または他の素材の学習をする。このような形で『断続的に』学習を継続し、徐々に学習の習熟度を増していく」¹⁰⁾ ことになる。

3ラウンド・システムでは、三つのストーリーと三つの目標 (①大まかな理解、②正解・詳細な理解、③話者の意図、結論などの理解) が掲げられている。通常ならストーリー1を扱う中で、大まかな理解、正解・詳細な理解、話者の意図、結論などの理解と進み、次にストーリー2の大まかな理解、正解・詳細な理解、話者の意図、結論などの理解、そしてストーリー3の大まかな理解、正解・詳細な理解、話者の意図、結論などの理解、で一区切り、ということになるだろう。しかしながら3ラウンド・システムでは分散学習を徹底し、ストーリー1の大まかな理解、次にストーリー2の大まかな理解、そしてストーリー3の大まかな理解、と進んだ (第一ラウンド) 後、ストーリー1の正解・詳細な理解、次にストーリー2の正解・詳細な理解、そしてストーリー3の正解・詳細な理解、と続き (第二ラウンド)、最後にストーリー1の話者の意図、結論などの理解、ストーリー2の話者の意図、結論などの理解、そしてストーリー3の話者の意図、結論などの理解 (第三ラウンド) で三ラウンドが完了するというデザインになっている¹¹⁾。

しかしながら、「英語Ⅳ」の実情 (クラスサイズは60名、一週間に一コマという時間的制約など) に鑑みると、3ラウンド・システムをそのまま採用するのは難しい。そこで、分散学習の形態は保ちつつ、一つのユニット、教材全体、応用問題を、それぞれ三段階に分けて学習を進めるようにした。

Critical Thinkers 各ユニットの三段階構成は、①聴き取り問題で大まかな理解、②その他の重要表現、本文内容理解のための設問や文法説明と練習、英文和訳の箇所では詳細・正確な理解、③応用問題 (3ラウンド・システムでの話者の意図・結論の理解のかわり) の

⁴ No.36は、「96項目」の第36番目に列挙されているという意味である。他のNo.がつく数字も同様である。

順序に進む。学習者に注目してもらいたい語彙・表現については、単に、文中出現順に解説するのではなく、①聴き取り問題の選択肢として、②その他の重要表現として、③内容理解のための設問や文法問題の解説の中で取り上げている。同じ語彙・表現が①から③まで毎回出現することもあるが、異なるものが扱われる場合もある。いずれにせよ学習者がこれらの語彙・表現に断続的に触れるように工夫している。授業では都度英語音声を流し、学習が進むにつれ理解度が上がるのを確かめてもらう。

更に *Critical Thinkers* 全体も、①事前情報（教材全体の大まかな理解）、②本体（合計41 ページ、詳細・正確な理解）、③応用・発展問題の三構成とし、段階毎に異なるアクティビティに取り組むようになっている。*Critical Thinkers* の構成を（図1）にまとめている。

	大まかな理解	詳細・正確な理解	応用問題（話者の意図・結論の理解のかわり）
<i>Critical Thinkers</i> 各ユニットの構成	① 聴き取り問題	② その他の重要表現、 内容理解のための設問や文法説明と練習、英文和訳	③ 応用問題 (和文英訳)
解説したい語彙・表現	① 聴き取り問題の選択肢として	② その他の重要表現として	③ 内容理解のための設問や文法問題の解説（補助・発展情報）の中で
<i>Critical Thinkers</i> 全体の構成	① 教材巻頭の事前情報	② 本体（合計41 ページ）	③ 応用問題（各ユニット末の応用問題（和文英訳）の答の集合からなる英文と内容理解）

図1 *Critical Thinkers* の構成

出所：筆者作成

Critical Thinkers 各ユニット末には和文英訳の設問がある。各ユニットで学んだ語句や文法事項を新文脈（2016年の米国大統領選挙）で用いて英文を完成させる。その英文を集めると、*Critical Thinkers* 巻末の応用問題の文章となる（順序は変えて、多少加筆調整）。これは、2016年度米国大統領選挙に関する情報を、堤（2016）を参考にして本稿筆者が執筆したものである¹²⁾。その文章を、内容理解の問題に解答して再確認する。実際の米国大統領選挙後には、『CNN English Express 編集部』編（2016）のような英語教材が出版されたが¹³⁾、教室外で学習者がそのような教材に接する際、抵抗感を和らげることを意図している。

3 ラウンド・システムでは、ラウンド毎に、学習者を助けるために情報を出す。第一ラウンドは、事前情報・参考情報・ヒント情報、第二ラウンドは、補助情報とヒント情報、第三ラウンドは発展情報とヒント情報である¹⁴⁾。参考情報・発展情報・ヒント情報については、2019年度に「英語IV」で *Critical Thinkers* を使用した際、補助教材としてパワーポイントスライドを作成し、本文の内容理解や文法事項の設問、和文英訳の解説の際に示

せるようにした⁵。また、補助情報として *Critical Thinkers* 巻末に、高木（2005）（プロパガンダ関連）¹⁵や森本（2015）（米国文化関連）¹⁶などを挙げた。

V. 日本を英語で発信する英語を目指すためのクリティカルシンキング

英語など外国語を用いるのは、異文化コミュニケーションの文脈であることが多い。その場合、日本人学習者は、日本を発信するためにも英語を用いることになるかと予想される。文化には見える部分と見えない部分のものがああり、しばしば英語教材には前者の具体例、例えば、茶道や着物、日本の行事についてなど観光ガイド的事柄が扱われる。しかしながら、それらを支えているのは見えない部分の文化であり、そこへの気づきも異文化理解の場では重要である。そもそも、着物を着用する者は 21 世紀の日本にはほとんどいないし、畳の部屋がない住居もある。それでも日本が日本でいられるのは、見えない部分での日本的なる文化が堅固であるためであろう。そのような見えない文化は文字通り見えないだけに普段は気付くことが難しい（見える文化・見えない文化については、八代ら（2009, pp.18-20）を参照¹⁷）。そして異文化と出会う時、理解しづらいのは、この見えない部分での文化なのである。他文化人から、日本文化について発せられる、なぜ、という問いに答えるには、根底にある見えない文化に関する知識が役に立つ。クリティカルシンキング力が強まれば、見えない文化への関心もおのずと高まるだろう。クリティカルシンキングは、当たり前だと思っている事柄をあらためて見直すよう促すことになるからである。今回クリティカルシンキングを教材に取り入れたのは、この教材をきっかけに、隠れて見えない領域にも目を向ける力をつけてもらいたいためでもある。

来年 2021 年度は *Critical Thinkers* 使用三年目となるが、今後の課題としては、①語彙と文法事項のための復習教材開発、②英語力の伸びの測定、③クリティカルシンキング力の伸びの測定、④新教材執筆への準備、である。

語彙・文法事項については、2020 年度はウェブ上で復習問題を作成しているが、更に体系的に項目を提示できるクイズを揃えていく。これらは、形成的評価（formative assessment）のためである。*Critical Thinkers* で扱った事項の習得状況を測る総括的評価（summative assessment）については、2019 年度作成した中間・期末テストの内容を改善していく。またアンケートを取り、*Critical Thinkers* 使用後は英語に対する苦手意識や嫌悪などが弱まったかについても把握しておくことは、今後の教材開発に役立つだろう。

Critical Thinkers は英語教材であり、主目標は学習者の英語力増強であるが、クリティカルシンキングへの興味やその力の伸びなども確認する価値があるだろう。ビジネス界でクリティカルシンキングの注目度が高まるにつれ、インターネット上で情報が提供され、クリティカルシンキング力を図る例題も示されている。しかしながら、それらの例題は、社会人としての知識と経験がないと設問そのものが理解しづらいようだ。大学生のクリティカルシンキング力の測定には、大学生が取り組みやすい設問を提示する必要がある⁶。

Critical Thinkers では、クリティカルシンキングに関連する限られた数のエピソードしか扱えなかった。今後、新教材の形で、クリティカルシンキングと日本の見えざる文化をリンクさせた英文を執筆していくこともできる。それを出発点として、学習者が日本の思いがけない側面に気づき、英語で発信したいという思いが強まれば、英語学習の有効な動

⁵ 聴き取り問題のヒント情報は英語音声を流す際に、教員が口頭で提示している。

⁶ ゼックミスタとジョンソン（前掲書）に収録されているクリティカルシンキング練習問題は社会人経験を必要としないので、これらを参考にすることも考えられる。

機付けともなるかもしれない。

謝辞

竹蓋（1997）を推薦して下さった星城大学経営学部神野真寿美教授と、*Critical Thinkers* 英文を校正し録音に協力して下さった ICHIKAWA Julie 氏に御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 加藤知子：日本を英語で発信できる学生の育成—Critical Thinkers are the Winners.—発表資料．平成 30 年度経営学部研究費助成研究報告会，2019 年 6 月 19 日星城大学東海キャンパス 1201 教室，2019.
- 2) E.B.ゼックミスタ，J.E.ジョンソン：クリティカルシンキング 入門編．宮元博章・道田泰司・谷口高士・菊池聡訳，北大路書房，ii，1996 [Zechmeister E.B. and Johnson J.E.: *Critical Thinking – A Functional Approach –*, 1992].
- 3) ゼックミスタ とジョンソン （前掲書、p.4）。
- 4) 同、p.5。
- 5) アンヌ・モレリ：戦争プロパガンダ 10 の法則．永田千奈訳，草思社，2002 [MORELLI, Anne: *PRINCIPLES ÉLÉMENTAIRES DE PROPAGANDE DE GUERRE*, 2001].
- 6) 竹蓋幸生：英語教育の科学—コミュニケーション能力の養成を目指して—．株式会社アルク，1997.
- 7) 相澤 一美 ，石川 慎一郎，村田年，磯達夫 ，上村俊彦 ，その他：JACET8000 英単語「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく．桐原書店，2005.
- 8) Someya Y: WORD LEVEL CHECKER © 英文語彙難易度解析プログラム．（オンライン），2009，<http://www.someya-net.com/wlc/>（参照 2020-11-8）
- 9) 竹蓋（前掲書，p.282）.
- 10) 同，p. 104.
- 11) 同，p. 96.
- 12) 堤未果：政府はもう嘘をつけない．角川新書，2016.
- 13) 『CNN English Express 編集部』編：[対訳]トランプ演説集．株式会社朝日出版社，2016.
- 14) 竹蓋（前掲書，p.96）.
- 15) 高木徹：ドキュメント 戦争広告代理店 —情報操作とボスニア戦争—．講談社文庫，2005.
- 16) 森本あんり：反知性主義—アメリカが生んだ「熱病」の正体—．新潮選書，2015.
- 17) 八代京子，町恵理子，小池浩子，吉田友子：異文化トレーニング[改訂版]—ボーダーレス社会を生きる—．三修社，2009.